

## 演題 「“アーティスト”に

### ならないために

《講師》都築響一氏(編集者・写真家)



都築響一さんには、悪天候の中、熊本に来ていただきました。講演では、

初めに熊本県立美術館で開催されている美術家連盟展二階の美術館収蔵品展示にふれられ、ご自身が広島市現代美術館で企画された、いわゆる隠れ収蔵品展の話をされました。

この展覧会で分かったことは、そんなに名作でなくても、ちゃんと光を当ていい展示をすると作品が輝いて見えるということでした。こういう企画をして、知られていない作家を見つけ

ていく。こんな、いい仕事はないですねと。また、以前、不知火美術館で見た塔本シスコ展にもふれられ、僕はこのように各地の美術館を廻って、それをメールマガジンに紹介しているのです。有料で週に一回出していますとも話され、本題に入りました。次はその概要です。

今日は、私の話から、なぜ絵を描いているのか、感じて頂いたら幸いです。

年々、老人たちの取材が増える中、この1月から4月にかけて渋谷公園通りギャラリーで「Mom's Art ニッポン国おかんアート村」展をやりました。多くのおばあさんたちが趣味として作ったおかんアートは、全国どこにでもあるのに、今までこの

類の展覧会がなかつた事はないですねと。

また、以前、不知火美術館で見た塔本シスコ

展の一画に、「おかんアートのはぐれ星」というコーナーを作りました。三人をフィーチャーしたのですが、その一人が嶋暎子さんです。最初に作品を見たのは、世田谷美術館分館の区民ギャラリーでです。新聞紙で作ったバッグがずらり並んでいて、完成度が高くて凄かつたです。その会場の片方には100号のコラージュ作品も並んでいて、これも素晴らしいかったです。新聞に入っている分譲マンションや分譲住宅、宝石などのチラシを集め、それを細かく切って何万個もコレクションしているのです。もともと広告紙の再生なんですが、丁度いいところに貼つてあるの

このおかんアート展のコラージュを作りました。最初に嶋暎子さんは、世田谷美術館分館の区民ギャラリーでです。新聞紙で作ったバッグがずらり並んでいて、完成度が高くて凄かつたです。その会場の片方には100号のコラージュ作品も並んでいて、これも素晴らしいかったです。新聞に入っている分譲マンションや分譲住宅、宝石などのチラシを集め、それを細かく切って何万個もコレクションしているのです。もともと広告紙の再生なんですが、丁度いいところに貼つてあるの

ですね。バベルの塔みた  
いのがあつたり、所々  
に人間がいて、どこに向  
かっているのかと本当に

に不思議な作品になつ  
てゐるので。嶋さんは、  
写植の仕事をやりなが  
ら、20代の頃は切り絵  
もやつていて、画廊で個  
展などもしているのです。  
フリーになり、自宅で写植  
の仕事をする中で、お父さ  
んお母さんの介護も重な  
り、めちゃくちや忙しい  
日々が40年ぐらい続いた  
そうです。これらの作品  
は、ようやく介護も一段  
落してから、家事が終  
わった後、夜中に作つた  
ものです。長年の介護な  
どで溜まつた鬱積した気  
持ちを作品作りによつ  
て少しでも和らげる、そ  
のことがこの人にとって  
はとても大切だった  
のです。

一つは、衣食住足りて樂  
しむアート。もう一つは、  
衣食住足りないから生  
まれるアートで、これは、  
絵を描いている間は辛  
いことを忘れるとか、痛  
みが和らぐとか、そういう  
「命綱」としての表現が  
あるアートです。僕がひ  
かれるのは、命綱のアーテ  
トのほうで、嶋さんの作  
品を素晴らしい感じた  
のはその思いが作品に  
詰まっているからなの  
です。

そういう人たちを随分  
取材してきました。いく  
つか紹介しましよう。

その一つが伊東さん  
という人。癌で、ものす  
ごい激痛の日々だつた  
そうです。それを何とか  
鎮めるために描いたの  
がこの仏画です。線で描  
いたように見えますが、  
よく見ると線は般若  
心經なんですよ。般若心經  
の文字で仏画を描いて

いたのです。その一文字  
一文字が病氣の痛み  
をこらえるのに役立つ  
たということです。

次はこの人です。実は  
元やくざの親分で、引退  
して始めたのがこの豚皮  
にハンダごてを温めて  
描いた焼絵です。長年、  
この道を歩いてきた人  
で、毎日飲んだり食つた  
りして体を酷使してい  
るうちに体がボロボロ  
になつて、絶えず激痛が  
走り、どうしようもなく  
なつて引退したのです。

さらに、最高度にギリ  
ギリの表現だと思うの  
は死刑囚の絵画ですね。  
死刑囚が弁護士さんに  
託して、送ってきたもの  
を死刑廃止の活動団体  
が集めて、毎年、死刑廃止  
月間に広島郊外の喫茶  
店で展覧会をしている  
のです。もちろん、死刑囚  
は独房にいるのですが、  
会えるのは担当の弁護  
士さんと担当の刑務員  
だけ。家族とも会えない  
のです。死刑囚にとつて

人工透析に通いながら、  
精力的に作品を作つて  
います。

僕は、芸術家という前  
に、絵を描いていれば少  
しでも楽になる世界があ  
るのだと、こういう人か  
ら教わるのです。それが  
プロの作品よりいいと  
は思いませんが、同じく  
らい尊いことではない  
かと思つたのです。

朝ご飯を食べた後、刑務  
官が回つていて自分の  
部屋の前で足音が止  
まつた時だそうです。こ  
れから君は：と言われ  
て死刑になるのです。そ  
れが1か月後のことも  
あれば、1年後のことも  
ある。10年後かもわから  
ない拷問の中にいるの  
です。このどうにもなら  
ないプレッシャーの中、  
写絵をする人もいれば、  
ただ反省する人もいる  
し、いろんなことをする  
人がいて、絵を描く人も  
いるのです。その中で  
送つてくるのが、これら  
の作品です。これは大牟田  
の事件で一家四人が死刑  
になった家族の次男の  
作品です。これは秋葉原  
で事件を起こした彼の  
作品です。他にもこのよ  
うに本当に不思議な絵

を描く人、土器みたいな絵を描く人、果物を描いたり、毎日の三食のメニューを描いたり、漫画みたいなのを描くなど本当に多彩な表現があります。ただただ刑を待つだけという究極のプレッシャーの中で生まれた表現です。作品は、全國のいくつかの場所を回ります。熊本に来たちょうど今、パリでやつています。今年いっぱいありますのでパリに行かれた時には見てください。

次に、抜群に面白い写真家を紹介します。天野裕氏君です。大牟田から

今日、この会場に来てくださいました。彼は、有望なサッカー選手でした。国見高校に行つてサガン鳥栖に入り、さらにブランジルで頑張つていまし

がをしたんです。やむなく大牟田に帰つて、母親の仕事を手伝つていましたが、このままではいけないと、サッカーと一番違つた世界で勝負してみようと写真を選んだのです。自分の5メートル以内にあるものを撮つた写真集「塩竈の仏芝居」でいきなり受賞。

普通なら、それを積み重ねて写真家になるのですが、彼はそうではなく、車で旅をします。ファミレスで食事、車で寝泊りし、撮つた写真をパソコンで編集。それをコンビニでプリントし、そのうち分厚い写真集ができるのです。普通は写真展をするのですが、彼はそうではなく、写真集を見せるのでです。ツイッターで

見に来る人を募り、1時間に一人ずつ、予約を取り、見物料を一冊千円も

らつて、1対1で会つて見せているのです。そこがスナックだつたり、ファミレスだつたりで、見る方も緊張するけど、見せる方も緊張です。それでお金をもらって、たまにはプリントを売つて生活しているのです。

生まれてくるアートは衣食住足りて生まれてくるアートとは全然違う真実感を持っているのですね。でも、このプレッシャーで生まれる表現は、先生が教えてくれるものでないし、家族が教えてくれるものもなく、また、みんなが目指して出来るることはないでしょう。

一生大切なことで、学校とか先生とかに教えてもらうのとは全然逆なことは、耳をふさぐべを

してみようと思いません。自分の5メートル以内にあるものを撮つた写真集「塩竈の仏芝居」でいきなり受賞。普通も面白いので会いに行きました。これは彼の愛車で、その時すでに走行距離が一回り半。ご飯代とかガソリン代を捻出して、いくらでも日本中を回つていればいいわけです。こんな風にして生活している人がいるのかと、本当にうらやましい。写真メディアと全然違つたところで動いていられる。凄いなと思います。

う人達を見て思います。実はこういふ人達を見て思いますが、耳をふさいだがためにこうなつた、という言葉もあるし、どっちがいいかわからないけど、こういう風に、違つた形でアートと寄りそつて向き合う人もいるのだ、ということが分かつてもらえればここに来た甲斐があつたかなと思います。

ありがとうございます。僕の家族にもそういういますよ。僕の家族にもその人のためを思う心温かい助言なんですが、何かやりたくてたまらないという時には耳をふさぎたくなります。その時、どうやって耳をふさげるかということが

尚、紙面の都合で、現代詩の話を割愛させて頂きました。都築さんの著書「夜露死苦現代詩」(ちくま文庫)に詳しく書かれています。

(正村タカシ)